

# 「良寛さん」の偉さに迫る

長岡大学教授 定方 昭夫

## 【目次】

- 1.「良寛さん心の病人説」？
- 2.「良寛さんただの乞食坊主」？
- 3.「良寛さんなぜ偉い」？

## 「良寛さん心の病人」説？

新潟の生んだ「良寛さん」ときけば、日本人の誰でもが、「アア、あのこどもと手まりをついて遊んだお坊さんか。」と、何やらなつかしいイメージが湧いてくることと思う。

その良寛さん、単にお坊さんというだけでなく、そのよまれた万葉調の和歌・漢詩、更に断簡零墨は在世中のみならず後生高く評価され、特に書に至ってはかの空海（弘法大師）と並び称せられる程である。

それ程芸術家としては一流と認められている良寛さんであるが、さて本職であるお坊さんとしては、いろいろ評価が分かれる。

良寛さんに対する毀誉褒貶は、まさに対極をなすといってよい。心理学者の宮城音弥氏は、「良寛は奇人であった。分裂質というよりも性格異常で分裂病質というべき人間であった」（１）「彼は物事に頓着せず、不注意、いつもボカンとしていたのは、分裂病者（今は統合失調症という）にみられる意思減弱状態（ヒポブリア）に似た傾向があつて、これが多くの逸話を残したのである。」（２）「タバコが大好きだったがキセルなどをすぐなくすので、ナワにつけて帯に結んでいたのも意思減弱のためであるし、良寛の書いたものに脱字や誤字が多いのもそのためである。」（３）

宮城の上のような精神医学からの良寛さんに対する評価は、いささか手厳しいものがあり、良寛ファンが聞いたら怒り心頭に発する底のものがある。

上に引用したような見方をどう考えるべきか？自分に理解できないヒトに遭遇した場合そのヒトを「病的」と切って捨てる悪い見本のような気が筆者にはしてならない。精神医学に発するそのような見方が、時に芸術理解に資することもあるのを筆者は否定しないし病跡学（パトグラフィ）の一定程度の有効性も認めるものではある。しかしながら良寛さんそのヒトを理解するにあたって上のような見方が果たして良寛さんそのヒトの実態に迫りうるものか大いに疑問とするものである。とはいえ、上に紹介したような見方が時として新説としてもてはやされることもあるのである。宮城のような説が出てくるのも、その理由の一つに良寛さんの奇行がある。

庄屋解良家の栄重が、若い時見聞きした良寛さんの言行をまとめた「良寛禅師奇話」（野島出版）なる本を読むと、さまざまな良寛さんの奇行がつつられていて何とも興味深い。

「師はあるとき、茶会によばれたことがあった。その時は濃茶であった。師はこれを飲みほしてしましたが、ふと横を見たら次の客がいた。しかたがないので、口の中に残っていた茶を茶碗の中に戻して次客に回した。その人は、念仏を唱えて飲んだ、と話された。……同じ茶会のことだったか、師は鼻くそをとって右側に置こうとした。右の客は袖を引いて注意した。しかたなく左に置こうとした。左の客も袖を引いた。師はやむを得ず鼻くそを鼻の中に戻したという。」(4)

「ある人が師に言った。『金を拾うことは大変うれしいことです。』と。師は自分で金を捨てて試しに拾ってみた。ところがさっぱりうれしくないで、『人は私をだましたのではないか』と疑った。何回も繰り返し捨てていたら、本当になくなってしまった。師は驚いて、あらゆる手段を尽くしてようやく見つけた。ほっとすると同時に、うれしくなった。そこで言われた。『あの人は私をだましてはいなかった』と。」(5)

これらの話を読んでみると、良寛さんはやはりチョットどころか大いに変わっているな<sup>7</sup>という感じがしてくる。若い時はボンヤリしていて昼行灯とよばれたこともあるそうだから、良寛さんに対する宮城説のような否定的評価があってもおかしくはない。

良寛在世当時でさえ、その声望を聞き伝えた坂口文仲（坂口安吾はその玄孫）は、その住まいである五合庵を訪ねてお互いに和歌を交換しあったというに、その後良寛は偽道人である、といってその書をことごとく人に与えたという話がある位である。(6)

宮城説の当否を筆者がここで論ずるよりも国文学者石田が明確な反論を記しているので、ここに紹介する。「このような宮城氏の考え方には大きな疑問がもたれる。なるほど良寛が分裂気質であったことは否定しえないことであるけれど、それ以上でなかったことは、次のような検討によって確かであると思われる。(1) 良寛を精神病的に見ようとする最大の根拠は、あの常識を大きく超えた奇行・愚行であるが、それは後に述べるように、禅の『蕩々任運』『心身脱落』から来た部分が多いからであって、直ちに精神病的なものとは考えられない。(2) 良寛の詩や歌をどんなに細かく検討し分析してみても、精神病的なものは見られず、その中に流れる意識の動きは常人以上に精緻で健康である。(3) 分裂病のもっとも顕著な特徴といわれる幻聴についてみても、その形跡はまったくなく、その詩の声調は常人のもの以上に澄み、幻聴的な雑音はまったくない。(4) 多くの村人があれほどの奇行に接しながら、終生尊敬を失わなかったことが知られる。村人の観察の総合的結果は、なまじっかな精神科医の観察よりも正確であり、正常者と病者との差異がいかに微細で観察困難でも、彼ら村人たちをだましおおせるものではないと考えられる。(5) 晩年になると心身脱落の状態が進み、いよいよ常人離れしてきたけれど、それは右の心身脱落状態の進行と老枯との結果と思われる、病的状態はまったく見ることはできない。最後の病床で貞心尼・由之らと詠み交わした歌も正常であり、医者に送った症状の報告など、今日の専門の医師や看護師の報告のように正確で要領を得ており、最後に辞世代わりに口ずさんだ「裏を見せ表を見せて散るもみじ」も、死に対する禅的諦観として、名優の心地のごとく清澄で健康であったことが考えられる。」(7)

この石田の反論で、宮城の言うような「良寛さん心の病人説」は完全に否定されたと考えてよいと筆者には思えるので、今後そのような誤った説に耳を傾けることはまったくの無駄とここで断言しておこう。その奇行よりも普段の行動から良寛さんの人間性に対して疑問を抱く要因のもう一つとして、僧侶としての良寛さんに対する否定的評価がある。

## 「良寛さんはだだの乞食坊主」？

坊主のくせに寺を持って説法するでなし、村の素封家に食べる物をねだるか、托鉢しては生きていた只の乞食坊主にすぎないじゃないか、というのが極端ながら一方の見方である。例えば、禅門での修業体験もある小説家水上勉は、次のように良寛さんに対して厳しい評価を下す、「中国禅の高僧百丈禅師は、一日作さざれば一日喰らわず、といわれた。しかし良寛様は、何もせずぶらぶらして暮らしたけしきである。子供と手まりつきなどしているうちに日が暮れては、百丈さまから大喝を喰らうなまけものではないのか。」（8、水上の名誉のために一言付け加えておくと、後に書かれた「良寛」にはこのような言い方は見られない。）右のような物言いからすると、良寛さんは人にただ食べ物を乞う乞食坊主に過ぎなくなってしまう。仏教にあつては僧が在家に食べ物を乞うという行為は、働かない人間が他人にただで食べ物をくれ、とお願いするのと同じことではない。仏陀の言葉に最も近い詩句を集めたとされる「スッタニパータ」に、次のような一句があるのを、水上はお忘れであろうか？「田を耕すバラモンが師（ブッダ）が食を受けるために立っているのを見て、言う。『道の人よ。私は耕して播く。耕して播いたあとで食う。道の人よ。あなたもまた耕せ、また働け。耕して播いたあとで食え』と。（師は答えた）『バラモンよ。わたくしもまた耕して播く。耕して播いてから食う』と。…『信仰は種子（たね）である。苦行は雨である。知恵はわがくびきとすきである。…この耕作はこのようになされ、甘露の果報をもたらす』」（9）仏陀の喩え豊かにして明快な答えに納得したバラモンはブッダに乳粥を捧げることとなる。右に引いた経典の一節は仏教における托鉢のあり方の原点を解き明かすものとして記憶しておくべき一シーンである。

自らも曹洞宗の僧籍をお持ちの長谷川洋三氏（元早稲田大学教授、英文学者）は、良寛の托鉢行に深い仏教的意義を見出し、次のように述べる、「僧は在家に法という財（福德を含む）を布施することによって、本来すべての人間に備わっている菩提心や仏性を呼びさまし、一方の在家は僧に財という法を布施することによって「形枯（ぎょうこ）を療ぜしめ成道を得しめる（「五観の偈」にある言葉で「体力をつけさせ、悟りを得るようになさせしめる」という意味）のである。（10）同じく良寛の托鉢行を考察した長谷川の文章は次のように締めくくられている、「彼は生涯、職もなく食（じき）を乞い求めて遊びくらしていたのではない。野に生きる托鉢僧としての自覚を持ち、布施行を通して弘法をし、僧としての職務を全うしていたのである。寺院における弘法ではなく、野における弘法を全うしていたのである。」（11）

托鉢行の意義に関する緻密な論証は長谷川の著書にゆずって、ここでは托鉢が単なる食の授受に終わるものでなく、それ以上に深い意味があることが伝わればよしとしよう。良寛さんに対するマイナス評価への反論ばかりあげてきたが、良寛さんへの肯定的、いなそれ以上の評価を紹介していこう。広い世の中である、それに対して良寛こそ学徳兼備の高僧である、として鑽仰の念置くあたわずという人々も多くおられる。

まず徳についていえば、やはり同じく「良寛禅師奇話」には次のような一節もあるのである、「師は私の家に二晩泊まれた。その時、私のうちは主人から使用人までお互いを思いやって睦み合い、帰られてからも、数日のあいだは和やかな気分が家に満ちていた。師と一晚語りあうと、胸のなか

は清々しい感じになる。師はお経の説教で善いことを勧められるわけではない。ときどき台所で火を焚く手伝いをしたり、座敷で坐禅をしたりされていた。話の内容も難しい古典に触れるわけではない。世間一般のこむずかしい人の道とやらを話をするわけでもない。ただゆったりとしているだけで、どう説明してよいかわからないが、その人となりから滲み出るものが、人を自然と教化するのである。」(12)

「無為にして民自ずから化す」という言葉があるが、上に描かれた良寛さんこそが、まさにその人であろう。何もせず只そこにいてだけで人の心をなごませる人間は、そんじょそこらにいるものではない。

その奇行だけを見ていれば、誰でも首をかしげずにはいられないが、上のような別の一面を目にすれば、人間としての良寛さんが只者でなかったことが了解されることと思う。

先に紹介した長谷川は、長らく良寛さんを研究した結果、「良寛禅師をその悟境と風光の角度から見ると、仏教僧侶として半人前でなく、むしろ全く逆に理想の人であると思うばかりでなく、他の普遍宗教にも通用する世界的意味を持つ人物であると思っている。」(13)とされておられる。

それでは良寛さんの学問はどうであったか？良寛さんが「法華經」に対してつけた漢詩による讃である「法華讃」を研究した竹村牧男氏は、「そこに良寛の明白な道眼、高度な批評精神が至る所、発揮されている。」(14)と高く評価している。

こうみてくれば、奇人良寛というイメージを訂正しなければ、というように思えてくるのではなかろうか？

それでは筆者自身の良寛さんに対する評価はどうか？

## 「良寛さんはなぜ偉い」？

一通り良寛さんの伝記に目を通し、歌・詩を時に口ずさみ、たまに図録で書に親しむ筆者には、確かにそれらの作品が「いいな」とは思えるものの良寛さんのどこが偉いか、今一つ腑に落ちなかったというのが正直なところであった。

もう二十年も前のことであるが、趣味関係の月刊雑誌を手広く発行し自社ビルを建てたある出版社の社長さんと話をしていた、談たまたま良寛さんのことに及んだ時、「社長室に良寛さんの書置いてあるよ。」というので、「是非拝見させて下さい。」とお願いしたら、気楽に社長室の大きな机の上に、やおら掛け軸を広げて拝見させて頂くこととなった。氏に断って軸から5cm位左手を離してスーと書かれた文字(今となっては何が書かれていたか全く思い出せない)の上をすべらせたら、「スウー」と何やら温かい「氣」を感じたものであった。「これが良寛さんの発していた気かな。」と思った次第である。その時は只それだけで終わってしまったが、良寛さんの書とのご縁はこれで終わるものではなかった。

昨年(2005年)6月東京で木村家所蔵の良寛遺墨展が芝の美術倶楽部で開催された。良寛さんが国上山を下りて後の最晩年を世話した木村家が秘蔵している書が見られるというので、わざわざ出かけていった。

というのも良寛在世時から贋作が出回ったとのこと。没後二百年以上を経ても事情は同じである。

こんな恐ろしい話もある、かつてNHKのトンチ教室に出演しておられた石黒敬七氏が書いておられる事だ、「僕の知合いにも一人良寛書きの名人Y君がいる。この男の良寛は相当数真物として日本中に流布しているようだ。というのは東京の一流百貨店で良寛遺墨展と銘打った展覧会があった後に、そのY君が上京してきて拙宅に一泊した。Y君は展覧会の目録を見ながら、これもおれのだ、これもおれのだと指す。その数は一枚か二枚頁をめくると一つ出てくるが如く多く、こんなに多くのY良寛が世の中に出てくるとしたらうかつに良寛など買えないと思った。」(15)

批評家のかの小林秀雄が良寛さんの書幅を入手して、自慢げに友人に見せた所、その彼が一目見て、「あ、これは贋物だね。」というので、カッとなった小林はそばにあった日本刀でその掛け軸を一刀両断にしたという話もある。(小林秀雄著「真贋」新潮文庫、昭和36年、192頁)

なにしろ地元新潟にある、良寛さんを記念する半ば公的施設にさえ、良寛さんの贋物の書が飾られているという話もある位だから、油断も隙もないとはまさにこのことである。

閑話休題。その点木村家の墨跡は、すべて間違いなく本物というお墨付きのものばかりだから安心して拝見できるというものである。

開館後すぐに入場したせいか会場はそれ程混雑していないので、筆者でも何とか読める楷書の一字一句を遠くから右手の人差し指でなぞっていった。ただ達筆といってもよいひらがなとなるともうダメで、目で全体の印象を味わうだけということになる。さて一通り拝見して会場を後にして数歩歩み出した時、何とも玄妙な感じを味わった。

それというのも、お会いしたことのない(当然!)良寛さんが目の前にいますが如く大変慕わしい、という感覚なのである。

筆者も生まれてこのかた多くの素晴らしい、人間として立派な方々との出会いがあった。しかし生きている生身の人間に、このような「想い」を抱いたことはなかったといってよい。何とも不思議な感じであった。

次の瞬間、筆者の胸をよぎったのは、「アア、やはり良寛さんは偉かったんだ!」という思いで、これで良寛さんの人間としての偉さが腑に落ちたという次第である。

言ってみれば、人間でありながら人間を越えた存在としての良寛さんを感じられたのである。この辺りを長谷川は良寛さんの「人格」でなく「法格」(ほっかく=尊い部分)をこそ問題にすべきであると論じている。(16)

実は筆者はこの「慕わしい」という感覚と似た想いを前に味わったことがあるのである。

二十世紀最大の神秘家といわれたロシア生まれのグルジェフは、覚醒のためのワークとしての「神聖舞踏」なるものを考案して弟子に伝えたのであるが、一番弟子が指導する「神聖舞踏」が一時間弱の映画になって、もう10年以上も前に吉祥寺の映画館で上映された。これもワザワザその映画を見るために上京したのであったが、さて普段見ることもないような身体の動きを追った映画を見終わって映画館を後にした瞬間、何やら「懐かしい」感じが胸中に湧いてきて、「これは一体何なんだ?」という疑問とその「懐かしい」感じの両方を抱いたものであった。

後に友人たちを語らって、「神聖舞踏」とグルジェフの伝記映画「注目すべき人々との出会い」を映画会社から借りて、一日上映会を新潟市内で開いたことがあった。

「気功」をしばらく続けて気に対する感受性の開けた友人は、「神聖舞踏」を観た後、涙をぼろぼ

ろ流していた。

映画「神聖舞踏」にこめられた「何か」と彼のこころの内奥との間に一種の「感応」とも言えるものが起きたのであろう。

「書は人なり」という言葉もある。「書」を通して書いた人の在りようが見えてくる、ということ本来意味するのであろうが、「書」にしろ、舞踏の「型」にしろ、それを創作した人の「魂」のようなのものがこめられているのではないだろうか？ ささやかな体験ながらそんな気がしてならない。

良寛さんの書がいまだに人を引きつける秘密もそこら辺にあるのではないだろうか？

この問題を考える上で、参考になる一文に出会ったので、ここに引用したい。近代日本に古い神道の修行形態である禊を復活させた川面凡児が次のように書いている、「人間の直霊（なおび：引用者注、万有のもっとも奥にある靈魂）が筆を通じて、文章となり、詩歌となり、絵画となる。事業なれ、文章なれ、絵画なれその事業その文章その絵画の内底には、その人の直霊が宿り居るがゆえに、威厳放射、精神凜然として天を驚かし、世を畏服せしめ、地を動かし、人を驚嘆せしむるのである。絵画文章事業それ自身には、,,、かくのごときの権威あり、精神あり、かくの如きの色彩余韻があるのである」（17）人間の作り上げた何らかの作品に、作った人の一種の魂が入るという考えは現代人にとっていささかなじみにくいものがあるが、それでも筆者の体験を説明するに足るものがあるような気がしてならない。機械で作られた金属製品よりも、手作りの木工品のほうが作った人の手のぬくもりを感じるというのも、あながち素材の違いから来る錯覚ばかりではないと思うものである。良寛さん理解に深い洞察を示した「良寛禅師の悟境と風光」の「あとがき」で長谷川は記す、「三分野（引用者注：書・和歌・漢詩）全体からにじみ出る品格の高さ深さ、および精神の深さに感応したとき、人はいっそうの関心を持つようである。実は、同時代を生きた人々はあまり誤ることなく案外的確に理解し敬愛していた気配がある。直接に接していた人々は、いやおうなくその内奥に感応するからである」（18）とし、現代人の良寛さん理解の底の浅さを見事に批判している。新潟出身の氏は長らく良寛さんに私淑してきたが、「感応によってか、良寛禅師は高い悟境に達して高僧であるという思いを持つに至った」（19）氏は、若書きの「良寛の思想と精神風土」（早稲田大学出版部、1974年）を絶版とされた。自らの理解の浅さを反省されて、とのことであった。

ここで氏は自らの「感応」体験の具体については語られない。良寛さんにかかわるモノは殆ど見てきた、と記す氏のことであるから、その途上で筆者以上の「体験」をお持ちであるに違いない。

そのようなこころの内奥のことは、人に語るべきでない、という考えもあるかと思うが、我々が良寛さんの「真実相」を一般の方々に伝えていただくには、その一端なりとも語ってもらえたら、と思うのは良寛さんファンの筆者だけではないであろう。

「良寛さんの偉さに迫る」と題したこの拙論の終わりに、「迫る」ためにはやはり「感応」ということがキーになるということを改めて強調しておこう。

あわせて、書を前にしての「感応」体験について中国の書論等において関連することが論じられているようなことがあれば、ぜひともご教示をお願いして、本稿を閉じたい。

追記：本文中に、雑誌「良寛」（考古堂書店刊）連載中の「良寛さんにちなむ健康法」と重なる部分があることをお断りしておく。

〔引用文献〕

- 1 宮城音弥著「日本人の性格・県民性と歴史的人物」，朝日新聞社，1969年，218頁
- 2 同上，219頁
- 3 同上，220頁
- 4 解良栄重著「良寛禅師奇話」解説 野島出版，1995年，33~34頁
- 5 同上，47頁
- 6 宮栄二著「良寛」，三彩社，1969年，34頁
- 7 石田喜貞著「良寛」塙書房，1975年，254~255頁
- 8 水上勉著「良寛・正三・白隠」，秋田書店，1975年，10頁
- 9 中村元訳「ブッダのことばースッタニパータ」岩波文庫，1958年，21~22頁
- 10 長谷川洋三著「良寛禅師の真実相」，名著刊行会，1992年，168頁
- 11 長谷川洋三著「野にある仏者の面目」，「良寛まんだら考」所収，名著刊行会，1992年，129頁
- 12 前掲書4，129頁
- 13 長谷川洋三著「良寛禅師の悟境と風光」，大法輪閣，1997年，316頁
- 14 竹村牧男著「良寛『法華経』評釈」，春秋社，1997年，i頁
- 15 栗田勇他，「良寛さん」，とんぼの本，新潮社，1989年，127頁
- 16 前掲書10，14頁
- 17 川面凡児著「日本古典真義」，全集第二卷，八幡書店，1985年，880~881頁
- 18 前掲書13，315頁
- 19 前掲書13，316頁